

国際学部の「図書館ガイダンス」

国際学部 教授 高木 宏幸

1. 国際学部

平成26年の春から、国際学部設置準備委員会・国際学部開設準備委員会のメンバーとして国際学部の準備にかかわってきた。新学部の開設とはこれほどの労力を必要とするものかと驚いたが、久方ぶりに「仲間と苦勞して何かを作り上げる体験」をさせていただいた。関係の先生方、事務の皆様には感謝するばかりだ。

ご存じのように、国際学部は「入学してすぐの全員留学」がキーワードになっている。1年次後期から2年次前期にかけて、アメリカ、中国、台湾、韓国に留学し、そのリアルな体験を帰国後の学修に活かす。

帰国後、英語を専修言語とするグローバル専攻は「グローバル・スタディーズ」、「コミュニケーション・スタディーズ」、「アジアン・スタディーズ」で専門分野を追求する。地域研究、国際法、外交史、歴史学、文化人類学、心理学、言語学、外国文学、英語教育、組織英語力論、通訳・翻訳、ジャーナリズムなどの分野を専門とする教員が授業を担当し、しかも、その多くを英語で講じる。中国語・韓国語を専修言語とする東アジア専攻は、それ



ぞれの地域や言語の専門教育に加えて、グローバル専攻の「アジアン・スタディーズ」の科目も受講できる。また、両専攻とも、主に実務分野の科目を教える「学部共通開講科目」を履修できる。

設置認可がおりて「なかなかいいじゃないですか!」と達成感を味わっていた時期もあった。が、実際の開設準備をする段階になって、状況は甘くないことを悟ることになった。

たった半年の準備期間で五百人を超える学生全員を留学させるための実務の凄まじさは想像を絶する。教務関連の準備も大変だ。留学が1年次前期と2年次後期を分断することで、さまざまな問題が生じる。例えば、1年前期に不合格になった必修科目の再履修は3年前期まで待つことになる。第二言語の履修は2年次の「後期」からになるが、教員は確保できるか。1学年の留学をして、無事に教職課程の履修ができるのか。

2. 「基礎ゼミ」の準備

学部開設の前年の秋、ようやく開講科目の具体的な内容を話し合う余裕ができた。まず「基礎ゼミ」をどうするか、である。

「基礎ゼミ」は、ご存じの通り新入生全員が履修する必修科目で、やることは、大学生活への導入がスムーズにいくように、自校学習をしたり、目標を立てたり、ディスカッションをしたり、施設を見学したり、レポートの書き方を学んだり、と相場は決まっている。だが、留学で1年間日本を離れる国際学部の学生にとっては、少し状況が異なる。留学先で使わない知識や技能を扱っても、帰国後に

覚えていてくれる可能性はゼロに近いからだ。同じ「自校学習」でも、他学部とは違う工夫が必要になる。

「この内容は必要ですかね」、「これは帰国後でもいいね」、と内容を取捨選択していく中で、われわれが一致して重要だと思ったことのひとつが、「引用のルールを理解し、実践できること」であった。

もう28年も昔になるが、筆者は1988～1989年に神戸市の派遣留学生としてアメリカに留学した。日本では元号が変わり、中国では天安門事件が起こった年だ。たった1年の留学だったが、寮生活での中国人、韓国人、アメリカ人との議論や教室での濃密でアカデミックなやり取りは、少し大げさに言うと、人生を変えたと言っている。この体験があるから、私は国際学部の学生に大きな期待をしている。帰国後の彼ら・彼女らは、近畿大学のカルチャーをバージョンアップするかもしれないと思っている。

ところで、28年前、アメリカに着き、学期が始まった直後のことだ。新入の学部留学生だけが集められ「引用のルール」についての講義を受けさせられた。「あなたの母国ではそうではないかもしれないが、アメリカの大学では、レポートに剽窃があれば退学になることがある」と、壇上の教員が熱く語っていたのを覚えている。「出典を明記する」、「引用部分が明確に分かるように書く」、「引用部分が「主」になってはならない」といった引用のルールは、大学教員としては当然の話だが、留学まで3年間を過ごした日本の母校でそれらをきちんと教えられたことはなかったように思う。

状況は今でも変わらない。これまで、私は新入生に「引用のルール」の意味について口うるさく指導しているが、カリキュラムの中で体系的に指導するようになっていなかった。結果として、上級生になっても、ネット上の情報を丸ごとパワーポイントに落として、まるで自分が考え出したかのように発表し、出典すら示さない学生がいる。

国際学部の基礎ゼミの内容を議論する中で、特に若い先生方から「留学前に引用のルールをきちんと教えておきたい」という声が上がったのは、正直とても嬉しかった。ともすれば「外国語会話と留学だけ」という誤解を生みがちな国際学部だが（実際にそういう声も聞いたが）、「先生方は学問の方法をきちんと教えようとしている」ということが分かったからである。

3. 『基礎ゼミハンドブック』

国際学部は「ハンドブック作り」が好きである。これは多分、学内移籍組の先生方の元の学部のカルチャーが自然に広まったのだろうと思うが、その重要性は、学部が始まって本当に五百人の学生を1学科で教えるという状況に突入して初めて、痛いほど分かった。（実際、私は「授業のガイドライン」程度のことを決めておいて、詳細は各担当教員に任せればよいだろうと考えていた。）『ハンドブック』がなければ、おそらく基礎ゼミ全30クラスは、内容も進度も、收拾がつかない混乱ぶりだっただろうと思う。

『基礎ゼミガイドブック』の目次は次のようになっている。各回4～6ページの分量である。

各週の内容は、それぞれのテーマに詳しい先生方が執筆した。

第1週	オリエンテーション
第2週	近畿大学を知る（1）
第3週	近畿大学を知る（2）
第4週	留学について考える
第5週	大学での授業の特徴とノートの取り方・作り方
第6週	図書館ガイダンス
第7週	レポートの書き方を学ぶ（1）
第8週	レポートの書き方を学ぶ（2）
第9週	電子メールのマナー
第10週	インターネットとの「つき合い方」
第11週	プレゼンのしくみとレジュメ作成

- 第12週 卒業後を考える
第13週 私たちの街／大学の魅力を伝える
第14-15週 プレゼンテーション

学問的な情報の取り扱い方については、4週間をかけて学ぶ。まず第5週でノートの取り方を学び、情報の整理の仕方を知る。そして第6週の図書館ガイダンスで情報の能動的な入手方法を実践できるようになり、それをもとにして、第7週と第8週では、実際に引用に配慮したレポートを書く練習を行う。それぞれの回を執筆いただいた秦辰也先生、春木茂宏先生、福田裕大先生によるさまざまな工夫のおかげで、具体的に配慮が行き届いた内容になった。

『基礎ゼミハンドブック』で工夫したことのひとつに、「授業までにしておく課題」を毎回提示していることがある。例えば、第2週「近畿大学を知る(1)」では、「授業までに準備しておきましょう」として「近畿大学の創設者はどんな方でしょうか」、「近畿大学のはじまりはいつでしょうか」、「近畿大学の「建学の精神」と「教育の目的」は何でしょうか」などの問いかけについて、大学のホームページで調べるように指示されている。



4. 図書館ガイダンス

さて、図書館ガイダンスの回では、次週までの課題として、(1) 国際的な事柄の一つ書き出す、(2) それに関して調べてみたいリサーチ・クエスチョンを疑問文で書く、(3) 検索キーワードを5つ書き出す、という指示が出される。学生は、この課題を準備して図書館ガイダンスに臨むことになる。この準備ができていないと困ることになるので、前週の基礎ゼミ全クラスで、学生への周知徹底をお願いした。

図書館ガイダンス当日は、まず中央図書館の案内DVDを視聴したあと、準備してきたキーワードでOPACを使って文献を検索する。その結果出てきた書籍の内容を予測し、各自のリサーチ・クエスチョンに貢献しそうかどうかを判断し、書誌情報を『基礎ゼミハンドブック』上に記録させる。書籍についてのどんな情報を記録する必要があるかも知る。また、CiNiiと「日経テレコン」を使って論文と新聞記事の検索も同様におこなう。学生諸君は概ね楽しそうに取り組んでいたように思う。

改善点もある。まず、1年生にとっては盛りだくさんすぎたように思う。講師の図書館の職員さんと基礎ゼミ教員の連携にも改善が必要かもしれない。また、考えてくるテーマを「国際的なもの」ではなく「今一番興味を持っているもの」のようにした方が、学生の「食いつき」がよかったのではないかと声をいただいた。

あわただしく編集した冊子のため、改善すべき点は多い。いま、来年度に向けて『ハンドブック』改訂のための作業がおこなわれている。

5. 引用の実際を体験する

さて、図書館ガイダンスの翌週と翌々週の基礎ゼミのテーマは「レポートの書き方を学ぶ」で、実はここで「図書館ガイダンス」とリンクするようになっている。

まず、図書館ガイダンスの最後に、翌週までの課題として、検索した本の一冊を実際に

借りてきて翌週の基礎ゼミに持参せよという課題が出される。学生は、ガイダンスで「検索する」だけではなく、実際に図書館に足を運び、「現物を入手する」という行動を自分でおこなうのだ。

さらに、授業までにしておく課題として、図書館から借りて来た本の中から「興味を覚えた部分（10～15ページ程度）をよく読んで、気になった文章を最低3つ抜き出し、ノートなどに書き写した上で持参」するように指示がある。そして授業の中では、書き写してきた文章を使って、「引用」の方法を学んでいくという流れになっている。

図書館ガイダンスでは自分が興味を持ったことについて本や論文、記事を検索する方法を学び、図書館で本を借りる体験をし、借りて来た本を読み、興味を持った部分を書き出し、引用の方法を学ぶという一連の流れの中で、体験しつつ学ぶことになる。

6. おわりに

国際学部のカリキュラムは、他の学部のカリキュラムの反転版と言える。つまり、「基礎を修得してから発展へ」、「準備をしてから体験へ」という順序ではない。

高校を卒業したばかりの若者を、安全面など必要最小限の準備だけでとにかく全員留学させる。そして帰国後に、その体験を整理し、学問的関心につなげるという具合だ。語学力の面では、それは間違いなく大きな効果をもたらすだろう。その他の側面、例えば、社会的成熟、自主性、学問的関心、希望進路などの面で、それがどのような効果をもたらすか、1年後が楽しみである。

紹介した図書館ガイダンスのあり方も、「体験」をベースにした国際学部らしいものと言えるかもしれない。その効果がどう出てくるか、こちらも、彼ら・彼女らが帰国して本格的に専門分野に取り組み始めたときに、効果が出てくることを期待している。

